

『人間の権利の擁護』における ウルストンクラフトのレトリック

平倉 菜摘子

はじめに

メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) の『人間の権利の擁護』 (*A Vindication of the Rights of Men*, 1790) は、エドモンド・バーク (Edmund Burke) の『フランス革命の省察』 (*Reflections on the Revolution in France*, 1790, 以下『省察』) への反論として書かれた公開書簡 (open letter) である。タイトルからは人間の権利の理論的根拠を体系的に論じた書との印象を受けるが、内実は必ずしもそうとは言えないという指摘が研究者の間でなされている。¹ 次作『女性の権利の擁護』 (*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792) 同様、ウルストンクラフトが本書で議論の主題として取り上げたのは、18世紀イギリスにおける道徳哲学 (moral philosophy) の諸問題であり、人間の権利はその一つであったと考えられよう。² 彼女は従来から思索のテーマとしてきた諸問題を、バークという仮想敵を得て一気に言語化する機会を与えられ、その難題に果敢に取り組んだのである。

『人間の権利の擁護』におけるウルストンクラフトのバーク批判に関しては比較的早くから研究が積み重ねられており、その多くは両者の論争をフランス革命論争の一環として思想史的に解釈している (Bromwich 1995; Conniff 1999; O'Neill 2007)。しかしながら、ウルストンクラフトのバーク批判を文学的な見地から検証した研究に関しては、層が厚いとは言い難い。³ 本論では『人間の権利の擁護』におけるウルストンクラフトの文学的戦略を ①教育者の語り ②機知・揶揄という二つの点から検証する。バークという文学的才能に恵まれた政治家を仮想敵に得たからこそ可能になったともいえる、ウルストンクラフトの新たな語りを浮き彫りにしたい。

1 教育者の語り

「エドモンド・バーク閣下宛て書簡」という副題が示す通り、『人間の権利の擁護』の主要目的が『省察』の論破 (refutation) であることは論を俟たない。「敵と正面から向き合い、同じ土俵で戦おうとする」(5: 29)⁴ ウルストンクラフトの姿には、確かに「義憤に駆られて決闘を挑む女剣士」(清水・後藤・梅垣 iv) のような趣きがある。伝統的体制における二重のアウトサイダー (急進的知識人かつ女性) としての立場でバークの『省察』に論戦を挑んだウルストンクラフトは、彼の思想 (精神構造) を主な標的としたが、同時に彼の言語・文体にも矛先を向けた。高等教育の成果ともいえる修辞学を駆使して読者を翻弄するバークに対し、そのような教育の恩恵に与えなかったウルストンクラフトは、ほぼ独学で身につけた言語・文体をむしろ武器として戦いに挑んだのである。⁵ バークの文章に顕著な「美辞麗句と幼稚な感受性」に対する軽蔑がこみ上げてくるのを感じ、「中断して気持ちを落ち着かせる」場面もあるものの、最後まで勇敢に戦い抜く姿が印象的だ (5: 58)。『人間の権利の擁護』は、『省察』の思想的な面に加え、文学的な面に対しても論争を挑んだ書と考えられる。

しかしながら、注目すべきは、敵を倒すこと一相手の論の誤りを非難し、攻撃すること一を目的として書き始められたにもかかわらず、本書におけるウルストンクラフトの語りには教育者としての面が垣間見えるとい

う点だ。トマス・ペイン (Thomas Paine) やジェイムズ・マッキントッシュ (James Mackintosh) がパークの『省察』に冷ややかで危険な偽善性しか認めなかった事実に鑑みれば、「書簡の全体的な傾向から見て、あなたは自惚れが強いにしても、善良な人だと考えるべきでしょう」(5: 7) というウルストンクラフトの言葉には、揶揄も込められていようが、相手の善いところを認めようとする教育者としての資質が感じ取れる。『人間の権利の擁護』は、初期の教育書や児童文学という因襲的・保守的なジャンルからの脱皮という文脈で捉えられることが多いが、教育実践者 (学校教師、ガヴァネス) として世に出たウルストンクラフトは生涯を通じて社会全体の教育、底上げを目指していたのであり、パークに対する公開書簡にもその姿勢の片鱗が認められるのはむしろ当然といえるかもしれない。⁶ 裁判官のように客観的事実をもとに相手に処罰を加えたり裁いたりするのではなく、相手の誤りを指摘し、反省を促しつつ、自らも道徳的規範という役割を果たすため節制するというスタンスは、『実生活実話集』(Original Stories from Real Life, 1788) における母親代わりの教育者メイスン夫人の姿勢とも共鳴している。⁷

では、『人間の権利の擁護』におけるウルストンクラフトの教育的な語りを具体的に見てみよう。特筆すべきは、二人称の語り、すなわち“you”を主語にした語りの多用である。論争の書である以上、「わたし」を全面的に押し出してもよさそうなものだが、重要なのは「あなた」の言動を明らかにして批判・説諭を試みることであり、そのため“you”を主語とした語りが多く、読者は (かなり辛辣な語りの) 二人称小説を読んでいるかのような印象を受ける。⁸ 「あなたは皮肉を込めて民主主義者の一貫性を非難します」(5: 21)、「あなたはさらに論を進めて、プライス博士の意図を誤って伝え始めます」(5: 25)、「そのとき、あなたは計画的に行動したのです」(5: 28) 等のたたみかけるような調子は、名目上の宛先パークを飛び越えて、読者にパークと一体になったかのような錯覚を起こさせる。ウルストンクラフトはこの二人称の語りを駆使して、伝統的体制擁護というパーク的精神構造が生み出す悪徳の危険性を描き出すことにより、パーク及びその先にいる読者に反省と自己刷新を求めていると考えられる。

パークに『省察』の執筆を促したのは、イギリス非国教牧師リチャード・プライス (Richard Price) が出版した『祖国愛についての講話』(A Discourse on the Love of Our Country, 1789) であった。プライスは隣国フランスで起こった革命をイギリスの名誉革命 (1688 年) の反復と捉え、ゆえにフランス人も自由と立憲君主政体を樹立するという展望を寿いだのである (Bruyn 165)。この解釈を否定するパークは『省察』でプライスを「政治的説教師」(53)⁹ と揶揄し、彼のフランス革命賛美を慇懃無礼な文体で非難した。これに対し、ウルストンクラフトは二人称の語りを多用して次のように述べる。

In reprobating Dr Price's opinions you might have spared the man; and if you had had but half as much reverence for the grey hairs of virtue as for the accidental distinctions of rank, you would not have treated with such indecent familiarity and supercilious contempt, a member of the community whose talents and modest virtues place him high in the scale of moral excellence . . . Granting, for a moment, that Dr Price's political opinions are Utopian reveries, and that the world is not yet sufficiently civilized to adopt such a sublime system of morality; they could, however, only be the reveries of a benevolent mind . . . if a glimpse of the glad dawn of liberty rekindled the fire of youth in his veins, you . . . might have pardoned his unseemly transport. (5: 18)

プライス博士の意見を咎めるにしても、彼という人間に対しては、あなたは攻撃の手を緩めてもよかった

はずです。地位の偶然的な区別にあなたが捧げている崇敬のたとえ半分でも、あの白髪の有徳な方に向けてことができているならば、才能と慎み深い徳ゆえの見事な道徳観で高く評価されている共同体の一員に、あなたがあれほど下品で馴れ馴れしく、傲慢で侮蔑的な態度をとることはなかったでしょう。(中略) たとえプライス博士の政治的意見がユートピア的な夢想であり、世界がそのような崇高な道徳体系を採用するに足るほど文明化されていないとしても、その夢想は慈善の精神から生まれたのです。(中略) もし自由という喜ばしい夜明けの光が彼の血に若き日の炎を再び灯したならば、その時宜を得ない有頂天ぶりを、あなたは大目に見て差し上げるべきだったでしょう。

上記の一節には、本来敬うべき相手に思い上がった態度をとる人物に対し、自らの言動を振り返るよう働きかける教育者の声が聞き取れる。ただし、恩師ともいえるべきプライスを擁護するにあたり、ウルストンクラフトはバークをたしなめるだけでなく、彼に譲歩する姿勢も見せている。すなわち、バークが批判する通り、聖職者たるプライスの政治的意見はユートピア的な夢想に留まっていること、また彼にはフランス革命への期待が高じて我を忘れたかのように振舞う面があることを認めているのである。その上で、言動がどうあれ、プライスの精神構造の基盤をなすのは高い道徳性であることを指摘し、それをバークの非道徳性と対比させている。フランス王妃の美しい双眸に魅惑され、その実像—民衆の窮乏を省みようともしない、道義性や責任感に欠けた女性—を見過ごすバークに対し、社会的弱者の救済に生涯を捧げた非国教牧師プライスの高潔な人柄を強調することで、公開書簡の宛先バーク及びその先にいる幅広い層の読者に向けて、真の尊敬にふさわしい人間性とは何かを問いかけているのである。

ウルストンクラフトはまた、イギリス王室に対するバークの日和見主義的な態度にも義憤を覚えていた。1788年に国王ジョージ3世が精神に異常をきたし、いわゆる摂政危機が起こった際、即位を狙う皇太子から大蔵省主計長官(Paymaster-General)の地位を呈示されたバークは、ジョージ3世に回復の見込みがないことを証明すべく精神病院から統計資料をかき集めた上、全能の神が王を狂気に陥れ、「王座から追放した」(5: 27, n. c)と主張したのである。この折のバークの演説—ジョージ3世を鞭打たれたキリストに喩えたもの—について、ウルストンクラフトは二人称の語りを用いて次のように述べる。

Then you could in direct terms . . . exclaim without any pious qualms – ‘Ought they to make a mockery of him, putting a crown of thorns on his head, a reed in his hand, and dressing him in a raiment of purple, cry, Hail! King of the British!’ Where was your sensibility when you could utter this cruel mockery, equally insulting to God and man? Go hence, thou slave of impulse, look into the private recesses of thy heart, and take not a mote from thy brother’s eye, till thou hast removed the beam from thine own. (5: 26, original emphasis)

当時あなたは単刀直入な言い方で(中略)敬虔な良心の咎めを露ほども感じることなく、こう叫ぶことができたのです。「人々は彼を嘲るべきでしょうか。彼の頭上に茨の冠をかぶせ、手には葦を持たせ、紫の衣で正装させ、ブリテン人の国王万歳!と叫ぶべきでしょうか」。あなたが神も人間も同じように侮辱して、この残酷な嘲笑を口にできた時、あなたの感受性はどこにあったのですか。汝、衝動の奴隷よ、この場所から立ち去り、汝の心の隠れ家を覗きに行け。汝自身の目から梁を取り除くまでは、汝の兄弟の目から一片の塵をも取り出すことなかれ。

イギリスの伝統的体制をあれほど賛美していたバークが、私利私欲に駆られて狂気の国王を見捨て、彼を退位に追い込む陰謀に加担し、あまつさえそれが神意であると主張したのである。ウルストンクラフトは君主制賛美者ではなかったが、バークの非人間性には驚愕した。上記の一節で彼女は新約聖書を引用し、文字通り説教を試みている。「衝動の奴隷」と呼びかけている箇所は、聖書の原文では「偽善者 (hypocrite)」である。「偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除くがよい。そうすればはっきり見えるようになって、兄弟の目から塵を取り除くことができるだろう」(Matthew 7: 5, 邦訳は筆者による)。ウルストンクラフトにとって「あらゆる偽善者の中で、私の魂がもっとも怒りを感じてはねつけるのは宗教的偽善者」(5: 26) だった。「神も人間も同じように侮辱」するバークに聖書の言葉で説教を垂れたのは、教育者としての語りの中に、牧師プライスへのオマージュを織り込んだ面もあると考えられよう。

過ちを犯した相手を裁いたり処罰したりするのではなく、過ちの原因を探し、自らの弱さを克服するよう導く教育者としての資質がもっとも顕著なのは以下の一節であろう。狂気に陥った国王から大急ぎで「世襲的特権のすべてを剥ぎ取る」ことを望み、国王の「譫妄状態が慢性の狂気に定着するかどうかを時が決するまで待つことができなかつた」バークに対し、ウルストンクラフトは改めて理性の重要性を持ち出す (5: 27)。

Where then was the infallibility of that extolled instinct which rises above reason? was it warped by vanity, or *hurled* from its throne by self-interest? To your own heart answer these questions in the sober hours of reflection – and, after reviewing this gust of passion, learn to respect the sovereignty of reason. (5: 27, original emphasis)

理性に優るものとして（あなたに）激賞された本能の無謬性はどこにあったのですか。虚栄心によって捻じ曲げられたのですか。それとも私益によって王座から追放されたのですか。落ち着いて省察に臨む折に、自分の心に対して、これらの問いに答えてください。そして、こうした情念の噴出をよく見直した後、理性の主権を敬うことを学ぶのです。

「これらの問いに答えよ」「理性の主権を敬うことを学べ」とは、まさに生徒に対する教師の語りを思わせる。私的書簡で妹たちに説教めいた指示をするときの声にも近い。老獪な政治家バークに対し、上記のような淡々とした命令文で理性を敬うよう呼びかけるとは、匿名出版とはいえ肝の据わった著者である。なお、『人間の権利の擁護』には全編を通して「閣下 (Sir)」という呼びかけが使われており、書簡の形式としては相手に敬意を払っているが、上記の一節に顕著な通り、“I” と “you” の精神的な関係は対等といえよう。“Sir” という呼びかけはバーク本人が『省察』で用いたものであり、ウルストンクラフトは公開書簡というスタイルとともに、呼びかけの方法も踏襲したと考えられる。『人間の権利の擁護』に “Sir” は 25 回登場するが、相手に対する尊敬の念を示すというより、読者の注意喚起が必要な箇所に投入されたり、揶揄を込めて用いられている。後者に関しては次節で詳しく検証する。

『人間の権利の擁護』の最後の 5 頁には “Sir” が登場しない。特に最後の 2 頁に入ると、ウルストンクラフトは一人称の語りを最小限に抑え、二人称の語りを強烈に響かせていく。以下の一節では一人称が完全に身を引く、〈理性〉とバークの想像上の対話が二人称で語られる。

Your reason may have often been the dupe of your imagination; but say, did you not sometimes angrily bid her be still, when she whispered that you were departing from strict truth? Or, when assuming the awful form of conscience, and only smiling at the vagaries of vanity, did she not austere bid you recollect your own errors, before you lifted the avenging stone? Did she not sometimes wave her hand, when you poured forth a torrent of shining sentences, and beseech you to concatenate them – plainly telling you that the impassioned eloquence of the heart was calculated rather to affect than dazzle the reader, whom it hurried along to conviction? (5: 59)

あなたの理性は想像力に騙されることが度々あったのかもしれませんが。でも、例えば、あなたは厳格な真理から逸れていますよと理性が囁いたとき、あなたは時折怒って、黙っているようにと理性に命じはしませんでしたか？あるいは、(理性が)良心という畏怖すべき姿を身にまとして、虚栄心の気まぐれにただ微笑んでいたとき、理性はあなたに—あなたが報復の石を持ち上げる前に—自分の誤りを思い出せと厳粛な声色で命じませんでしたか？あなたが煌めく文章の奔流を溢れ出させたとき、理性は時折手を振って、それらの文章を繋ぎ合わせるよう懇願しませんでしたか—心からの熱狂的な雄弁は、読者の目を眩ませて確信に急ぎ立てるより、その心の琴線に触れるように考えてなされるものだ、とあなたにはっきり伝えませんでしたか？

バーク本人の「煌めく文章の奔流」を思わせるような擬人法や比喩を織り込み、さらに当の相手に対する皮肉も効かせた上記の一節は、純粋な説論・説教とは言い難い。それでも、「理性に対する甚だしい反感」(5: 10)を持つバークに対し、神から与えられた理性の声をなぜ無視し続けるのかと問いかけるウルストンクラフトの語りには、粘り強い教師の精神が感じ取れよう。バークが『省察』で露呈した非人間性は本質的なものではなく、神が人間に与えた理性の声を無視し続けた結果であり、ゆえに理性の声に(再び)耳を傾ければ、人間性を取り戻すことができるという信念も窺える。論争を主眼とする『人間の権利の擁護』において、論敵の思想・言語と果敢に戦う「女剣士」ウルストンクラフトは、同時に、相手の過ちの原因を探り、反省を呼びかけ、相手の向上可能な能力を信じる教育者としての声をも響かせているのである。

2 機知・揶揄—文学者としての新境地

前節ではウルストンクラフトがバークの雄弁の奥にある虚栄心を見抜き、機知に富んだ揶揄を織り込みつつ、教育者としての責任感を持って語りかける様子を検証した。本節では彼女がこの機知・揶揄に本腰を入れて取り組み、バーク自身の「煌めく文章の奔流」を模倣しつつ、文学者として新たな境地を切り開いていく経緯を検証する。

前節で検証した通り、ウルストンクラフトは『人間の権利の擁護』においてバークという名目上の文通相手を超え、本命のターゲットたる読者にメッセージを送っている。バークの『省察』を読んだ人に対しては読後感の再検討を迫り、未読の人に対しては概略を説明しつつ、場合によっては警告を呼びかけるという多層的な語りは、『人間の権利の擁護』が書評として書き始められた(可能性もある)という事情も影響しているよう(Todd 163)。特定の実在人物に宛てた公開書簡というジャンルは、書き手がその人物をある意味で犠牲・生贄に供することで、周囲にいる人々(読者)との知的交流を図る祭儀のような様相も呈している。

『省察』に端を発する革命論争において、急進主義者たちに犠牲・生贄として祭り上げられたバークは、

それだけ大きな影響力をイギリス国民に対して持つ人物だった。当時の政治文化で重んじられた雄弁術 (oratory)、すなわち機知あるレトリックを即興で繰り出す手腕とそれを可能にする教養の深さで知られていた彼は、「議会を相手に数時間の即席演説すらできる」(半澤 399) 政治家だったのである。このパークを標的とした公論に参加するにあたり、ウルストンクラフト自身も機知あるレトリックを駆使しつつ、教養を示すべく古典からの引用や言及を試みている。

イギリスの伝統的体制を賛美するパークは、『省察』でフランス革命における教会財産の没収及び聖職者の特権剥奪を「犯罪行為」(107)として罵倒し、財産・所有権 (property) の擁護に熱烈な雄弁を披露していた。これに対し、ウルストンクラフトはシェイクスピアの『ハムレット』(Hamlet, 1600)の台詞を織り込んだ揶揄で応酬する。

But you return to your old firm ground. – *Art thou there, True-penny?* Must we swear to secure property, and make assurance doubly sure, to give your perturbed spirit rest? Peace, peace to the manes of thy patriotic phrensy. (5: 37, original emphasis)

あなたはいつもの堅固な地盤に戻ります。「そこにいるのか、正直者？」我々は財産の保全を誓い、念には念を入れてそれを保証しなければならないのでしょうか—あなたの狼狽した精神を落ち着かせるために？ 汝の愛国的熱狂の御霊に平安あれ。

「そこにいるのか、正直者？」とは、『ハムレット』第一幕に登場するユーモラスな台詞である (Hamlet 1. 5. 150, 以下、邦訳は筆者による)。先王である父の亡霊が現れ、王子ハムレットに復讐を誓わせ、姿を消す。父王が叔父に殺害されていたこと、その叔父が自分の母を娶り、現王の座に収まっていることに衝撃を受けつつも、亡霊という存在に対して懐疑的なハムレットは、その夜一緒にいた友人たちに亡霊を見たことを内密にするよう誓わせる。その彼の耳に、地下から「誓え (Swear)」という父王 (亡霊) の声が聞こえてくる。これに対するハムレットの台詞が、「そこにいるのか、正直者？」である。つまりウルストンクラフトは、無念さのため自らの地盤に落ち着くことが叶わず、この世にさまよい出て息子に「誓え」と繰り返す亡霊の姿にパークをなぞらえているのだ。

パークの地盤である「財産・所有権」はフランス革命によって危機に晒されている。その無念さから『省察』を書くに至った彼に対し、ウルストンクラフトは「あなたの狼狽した精神を落ち着かせるために (to give your perturbed spirit rest)」、我々は財産の保全を誓わなければならないのかと問うている。この表現は、『ハムレット』の前出に続く場面で「誓え」と繰り返す亡霊に対するハムレットの台詞、「落ち着け、落ち着け、狼狽した亡霊よ！ (Rest, rest, perturbed spirit!)」(1. 5. 182)を模したものだ。ウルストンクラフトはこの“Rest, rest”に応えるかのように、自らの言葉で「汝の愛国的熱狂の御霊に平安あれ (Peace, peace to the manes of thy patriotic phrensy)」と付け加えている。ここには、パークがプライスのフランス革命賛美を「若気の熱気 (juvenile warmth)」「熱狂 (enthusiasm)」(65)、「激情発作 (sally)」(66)、「非人間的で不自然な狂喜 (inhuman and unnatural rapture)」「邪な陶醉 (unhallowed transports)」(67)、「手放しの有頂天の発作 (fit of unguarded transport)」(72)などと軽蔑したことへの意趣返しも込められていよう。幾重にも揶揄が織り込まれた一節である。

上記の一節をさらに深読みすると、実体の定かではない亡霊という現象にパークを配し、その亡霊に悩ま

れる王子・息子に自らを喩えるウルストンクラフトの文学的戦略が浮かび上がる。「生前に犯した罪の数々が焼き浄められるまで」(1. 5. 12-13) 夜はさまよい歩き、昼は業火に取り巻かれているという亡霊は、カトリックの煉獄 (purgatory) からの使者と考えられよう (Barton 34)。一方、ハムレットの留学先はドイツのヴィッテンブルク大学、すなわちルター (Martin Luther) が教鞭をとっていたプロテスタントの牙城である (1. 2. 113)。プロテスタント信仰において煉獄は存在しない。¹⁰ ゆえに『ハムレット』の基調をなす復讐譚を、カトリック亡霊としての父とプロテスタント教育を受けた息子の対峙として読むこともできよう (Kastan 130-43)。アイルランド出身のバークが生涯に渡ってカトリック寄りの心情を持っていたことは当時よく知られていた。¹¹ ウルストンクラフトは『ハムレット』を引用することで公論にふさわしい教養を示しつつ、イギリス国教会を崇敬するバークにカトリック亡霊の役をあてがい、自らをプロテスタント寄りの息子としてさりげなく描き出すことで、表面上はバークの過剰な財産擁護を批判した一節の中に宗教的な揶揄をも織り込んでいると考えられる。

『人間の権利の擁護』には『ハムレット』以外にも『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*, 1595-96)、『リチャード3世』(*Richard III*, 1592)、『リア王』(*King Lear*, 1605-06) といったシェイクスピア作品がさりげなく引用されている (5: 9, 5: 29, 5: 43, 5: 60)。これは公論参画の必須条件とされた機知あるレトリックや古典的教養を広く読者に示すための試みであると同時に、『省察』に見られる演劇性の強い語りや、劇場通いを好んだバークに対する、揶揄を込めた挑戦とも考えられよう。¹² 国内の悲惨な現実から目を逸らし、劇場という虚構世界での出来事や異国の王妃の悲運に涙を流すバークの姿をウルストンクラフトは次のように描き出す。

Misery, to reach your heart, I perceive, must have its cap and bells; your tears are reserved . . . for the declamation of the theatre, or for the downfall of queens, whose rank alters the nature of folly, and throws a graceful veil over vices than degrade humanity; whilst the distress of many industrious mothers, whose *helpmates* have been torn from them, and the hungry cry of helpless babes, were vulgar sorrows that could not move your commiseration, though they might extort an alms. (5: 15-16, original emphasis)

悲惨というものがあなたの心に届くためには、宮廷道化師の衣装を身に着けていなければならないようですね。あなたの涙は (中略) 劇場での熱弁用、あるいは王妃たちの没落のためにとっておかれるのですから。没落によって彼女たちの身分は愚かしさの本質を変え、人間性を墮落させる悪徳に優美な覆いを投げかけます。一方、配偶者から引き離された多くの勤勉な母親の困窮や、無力な赤ん坊が空腹に耐えかねて泣く声は大衆の悲哀であり、あなたの同情を呼び覚ますことはできないでしょう。こうした大衆の悲哀が (あなたから) 施しを巻き上げることはあるかもしれませんが。

想像力が生み出す虚構の美的世界に耽溺するバーク、特権階級を存続させるために人間性を奪われる国民、その苦しみを凝視するウルストンクラフトという構図が上記の一節から浮かび上がる。彼女はバークのみならず、『省察』の演劇的な世界に幻惑され、現実から浮遊した人々 (その多くは特権階級であろう) をも揶揄しつつ批判しているのだ。お芝居や隣国の王妃の悲運に涙を流している暇があったら、あなた (がた) の目の前で苦しんでいるイギリス国民の声に耳を傾けてください。義務として施しを与えるという消極的な姿勢ではなく、真の同情をもって彼らの人間性を尊重してください。そう訴える彼女の声が聞こえてくる。『省察』にお

けるバークの「激情に駆られた熱弁」(5: 10) や演劇性・虚構性の強い文体が、真理と簡潔さを信条とするウルストンクラフトの胸に「軽蔑」(5: 58) を湧き上がらせ、その「反駁の精神」(5: 53) に火をつけたことは間違いない。

しかしながら、同時に、バークの「煌めく文章」が彼女にとって抗い難い魅力を持っていたことを否定するのも難しいだろう。『人間の権利の擁護』においてウルストンクラフトは、毒には毒をもって制すべしといった感のある文学的戦略を試みているのである。「あなたの専制的原理を包み込んでいる壮麗な衣装が剥ぎ取られた姿」(5: 37) を本人に見せたいと願う彼女は、彼から剥ぎ取った「壮麗な衣装」を自分が身にまとうことにより、バーク本人にその滑稽さを見せつけているようにも感じられる。以下の一節でウルストンクラフトは、バークの仰々しい文体を揶揄しつつ、自らもその文体を模倣することで揶揄の効果を上げるといふ離れ業を演じている。

It is impossible to read half a dozen pages of your book without admiring your ingenuity, or indignantly spurning your sophisms. Words are heaped on words, till the understanding is confused by endeavouring to disentangle the sense, and the memory by tracing contradictions. After observing a host of these contradictions, it can scarcely be a breach of charity to think that you have often sacrificed your sincerity to enforce your favourite arguments, and called in your judgment to adjust the arrangement of words that could not convey its dictates. (5: 50)

あなたの本を6頁ほど読めば、あなたの巧妙さに感心したり、あなたの詭弁に憤慨してはねつけたりせざるを得ません。言葉の上に言葉が積み上げられ、意味のもつれを解きほぐす努力をしているうちに理解が曖昧になり、矛盾の源を辿るうちに記憶も曖昧になります。こうした多くの矛盾を観察した後で、(私が) こんな風に考えたとしても、慈愛精神に反することにはならないでしょう。つまり、あなたが誠実さを度々犠牲にしてまで、お気に入りの議論を押し通しているとか、あなたが自分の判断を持ち込んで言葉の並べ方を調整したために、実際に語られたことが伝達されなくなった、と考えたとしても。

『省察』はバークが「自分の判断を持ち込んだ」ために、「実際に語られたことが伝達されなくなった」書物であるとウルストンクラフトは揶揄している。彼は真理を追究する哲学者ではなく、また、実際に語られたことを誠実に伝達しようとする(真の)ジャーナリストでもなく、事実を自分の色で染め上げる政治家であり、しかもその言語表現を芸術の極みにまで高めた文学者でもあるというウルストンクラフトの理解が感じ取れよう。彼女はその理解を、バーク本人のみならず、その先にいる不特定多数の読者に向けても発信している。すなわち、『省察』という書物の性格を上記のように示すことで、バークの華麗で演劇的な文体に圧倒されず、常に批判精神をもって読むよう、読者に注意を呼びかけているのである。

これまで見てきたように、『人間の権利の擁護』においてウルストンクラフトは、バークの雄弁や馥郁たる文体・レトリックに反発しながらも、それを模倣して相手を揶揄することで、新たな言語表現を切り開いてきた。公開書簡の相手に「自分とは意見の合わない、熟練した作家」(5: 53)、しかもある種の毒を持つ人物を得たことで、ウルストンクラフトは「反駁の精神」をもって自らの思考力・文章力の限界に挑み、その殻を破ることができたのである。私的書簡を含め、ウルストンクラフトのこれまでの作品にほとんど見られないこの機知・揶揄というレトリックは、バークという文学的才能に恵まれた仮想敵を得たからこそ実現した文学的果実

であるといえよう。

おわりに

本論では『人間の権利の擁護』におけるウルストンクラフトの文学的戦略を ①教育者の語り ②機知・揶揄という二つの点から検証してきた。持ち前の教え諭すような語りと、論敵の機知あるレトリックを模倣する形でその過剰性を揶揄するという試みを擦り合わせたテキストは、底知れぬエネルギーを秘めた混沌ともいふべき様相を呈している。本書以前に公表された三作品には、読者をこれほど圧倒するような文体は見られない。また、6年後の『北欧からの手紙』(*Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway and Denmark*, 1796) でウルストンクラフトは再び書簡形式を採用し、事実と虚構の間を縫うような魅力的な語りを生み出すが、機知あるレトリックや揶揄の要素は希薄である。『人間の権利の擁護』が他の誰でもなく、パークという「文学的才能によってこの国で注目されるようになった」(5: 7) 政治家に宛てた公開書簡であることの重要性が浮かび上がるといえよう。本書で正面からパーク批判に挑戦したことをきっかけに、ウルストンクラフトは「思想家としての脱皮」(梅垣 267) を遂げると同時に、文学者としても新たな境地を切り開いたのである。

[注]

- ¹ 例えば、後藤・清水はウルストンクラフトが「人間の権利」という概念で意味しているのはフランス人権宣言における諸権利であると捉え、その対応関係を論じている(後藤・清水 213-20)。また、梅垣はウルストンクラフトが「権利」を論じることに二義的な関心しか示さなかったとする1990年代頃から定着した解釈、及び彼女の権利論を共和主義という枠組みで捉える近年の研究動向を紹介している(梅垣 251-55)。
- ² 『女性の権利の擁護』を政治経済論や女子教育の書と捉える向きもあったが、同時代の大半の読者はそれを哲学書(philosophical text)として受け止めた(Taylor 27)。
- ³ ウルストンクラフトが『人間の権利の擁護』において慣習的なジェンダー・ロールを反転させ、パークの「女々しさ(effeminacy)」を浮き彫りにする一方、自らを「男性的(manly)」な理性の代弁者として描き出す文学的手法はこれまで度々指摘されてきた(梅垣 237, 248-49)。この点に関しては筆者も既に論じたことがあるため(平倉 2013)、本論ではジェンダー的要素以外の文学的戦略を検証する。
- ⁴ 以下、ウルストンクラフトの著作からの引用は *The Works of Mary Wollstonecraft*, edited by Janet Todd and Marilyn Butler, William Pickering, 1989, 7 vols. に拠り、本文中の()内に巻番号及び頁数を入れて示す。邦訳は筆者による。
- ⁵ 中産階級出身のウルストンクラフトが受けた教育は、当時の女性としては一般的なものであった。9歳から15歳まではヨークシャーで通学制の女子校(a local day-school for girls)に通っている。18世紀に急増したこの種の学校は中産階級の少女を「職業人の妻」に仕立てることを目的としており、主な科目はフランス語の基礎、裁縫や刺繍、音楽、舞踊、作文であった(Todd 11-12)。彼女はこの時期、学友の父親からも個人的に教育を受けている。また、引っ越し先のロンドンでは隣人の牧師夫妻から読書の手ほどきを受けた。
- ⁶ ウルストンクラフトは20代半ばでロンドン北部のニューイントン・グリーン(Newington Green)に小規模の学校(私塾)を開く。当時、学校教師は「上級召使(upper servant)の一種」(4: 25)に過ぎず、高等教育を修めていない人間が務めることも稀ではなかった。彼女は妹二人と親友の協力を得て学校を経営

し、自らも教師として働く (Todd 56-58)。また、この時期に出会った非国教牧師リチャード・プライス (Richard Price) の影響を強く受け、理性・知性を重視した宗教観・教育観を抱くようになる (McKendry 146-54)。経営難で学校を閉じた後は友人の勧めで教師経験を文章にまとめ、初の著作『娘達の教育に関する考察』(*Thoughts on the Education of Daughters*, 1787) を上梓する。出版の労を取ったのは「書籍出版業の父」と呼ばれるジョセフ・ジョンソン (Joseph Johnson) であった。その後、アイルランド貴族子女のガヴァネス (governess, 住み込みの家庭教師) を務めて帰国した彼女は、ジョンソンのもとで書評や翻訳の仕事をしながら文章修行を積み、『人間の権利の擁護』を始めとする革新的な著作で名声を高めていく。ジョンソンは彼女にとって「雇い主というより恩師 (mentor)」(Gordon 129, quoted in Fallon 29) に近い存在であり、彼の書店で出会う文人や思想家、政治家、芸術家との知的交流がウルストンクラフトにとって高等教育の役を果たしたと考えられよう。

- ⁷ ガヴァネスの経験を基に書かれた『実生活実話集』は実話と銘打った創作物語である。ルソー (Jean-Jacques Rousseau) の『エミール』(*Émile, ou de l'Éducation*, 1762) における少年エミールと (神の如く) 遍在する教師の関係が、二人の少女と母親代わりの教育者メイスン夫人 (Mrs Mason) の関係に発展的に継承されている。知識は「諸感覚に直接働きかける事例 (example) を通じて段階的に与えられるべき」(4: 359) という主張が、虚構の挿話と想像上の会話という枠組みによって可能になったといえる (Ferguson 248)。
- ⁸ 二人称小説においては語り手が二人称 (英: you, 仏: vous, tu, 伊: Lei, tu) の視点を用いて物語を綴る。例えばビュートル (Butor 1957) やカルヴィーノ (Calvino 1979) を参照。
- ⁹ 以下、『フランス革命の省察』からの引用は Edmund Burke, *Reflections on the Revolution in France*, edited by Leslie Mitchell, Oxford UP, 2009 に拠り、本文中の () 内に頁数を入れて示す。邦訳は半澤 (1978) による。
- ¹⁰ イギリス国教会は煉獄の存在を認めておらず、ゆえにカトリック煉獄を真剣に扱う作品は冒瀆罪に抵触する恐れがあった。しかし『ハムレット』の亡霊は、当時隆盛を極めていた復讐悲劇 (revenge tragedy) の枠組みで捉えれば、(キリスト教以前の)「古典的伝統に由来するセネカ流の亡霊 (Senecan ghost coming from the Classical tradition)」と解釈し得るため、シェイクスピアは難を逃れることができたと考えられる (Masai 2017)。
- ¹¹ バークは「イギリス植民帝国の被抑圧者アイルランドの半カトリック家族出身者」(半澤 397) であり、イギリスではアウトサイダーとしての面を持っていた。彼は『省察』において国教会を基盤とする伝統体制を賛美する傍ら、フランスのカトリック教会及び聖職者の擁護に過剰ともいえるほどの頁を割いたため、「隠れカトリック (crypto-Catholic)」(Mitchell ix) という噂の真実性を自ら暴露しかねないほどだったのである。
- ¹² 例えば、1789年10月6日に暴徒がヴェルサイユ宮殿に乱入した事件をバークは想像によって劇的に描き出している。「この眠りからまず王妃が、扉を固める衛兵の声にはっと眼を醒まされました。彼は王妃に対してここを逃れて身をお助け下さいと絶叫しました。そしてこの叫びは彼が捧げ得た忠誠の最後の証でした。人々が彼に襲いかかり、彼は死にました。瞬時に切り倒されたのです。彼の血煙を浴びた残忍な凶漢と暗殺者の一団は王妃の寝室に突入し、銃剣で寝台を滅多突きにしました。この迫害された女性は辛うじてその直前、そこから、身に纏うものとして殆どなく、人殺し共には知られていない通路を通過して、国王にして夫君なる人の足下に助けを求め逃げ去ったのです」(71)。このような感傷性・虚構性に満ちたバークの語りには、保守派からも批判の声が上がった。

[引用文献 (Works Cited)]

- Barton, Anne. Introduction. *Hamlet*, by William Shakespeare, edited by T. J. B. Spencer, Penguin Books, 1980, pp. 7-54.
- Bromwich, David. "Wollstonecraft as a Critic of Burke." *Political Theory*, vol. 23, no. 4, Nov. 1995, pp. 617-34.
- Bruyn, Frans de. "Edmund Burke." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 164-72.
- Burke, Edmund. *Reflections on the Revolution in France*. 1790. Edited by Leslie Mitchell, Oxford UP, 2009.
[バーク, エドマンド『フランス革命の省察』半澤孝磨訳, みすず書房, 1978年]
- Butor, Michel. *La Modification*. Les éditions de minuit, 1957. [ビュートル, ミシェル『心変わり』清水徹訳, 岩波書店, 2005年]
- Calvino, Italo. *Se una notte d'inverno un viaggiatore*. Einaudi, 1979. [カルヴィーノ, イタロ『冬の夜ひとりの旅人が』脇功訳, 白水社, 2016年]
- Conniff, James. "Edmund Burke and His Critics: The Case of Mary Wollstonecraft." *Journal of the History of Ideas*, vol. 60, no. 2, Apr. 1999, pp. 299-318.
- Fallon, David. "Joseph Johnson." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 29-38.
- Ferguson, Frances. "Theories of Education." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 246-54.
- Gordon, Lyndall. *Vindication: A Life of Mary Wollstonecraft*. Virago, 2006.
- Johnson, Nancy E., and Paul Keen, editors. *Mary Wollstonecraft in Context*. Cambridge UP, 2020.
- Kastan, David Scott. *A Will to Believe: Shakespeare and Religion*. Oxford UP, 2014.
- Masai, Sonia, et al., speakers. "Hamlet." *BBC Radio 4 In Our Time*, 28 December 2017. <https://www.bbc.co.uk/programmes/b09jqtf5>. Accessed 3 August 2020.
- McKendry, Andrew. "Dissenters." Johnson and Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, pp. 146-54.
- Mitchell, Leslie. Introduction. *Reflections on the Revolution in France*, by Edmund Burke, edited by Leslie Mitchell, Oxford UP, 2009, pp. vii-xix.
- O'Neill, Daniel I. *The Burke-Wollstonecraft Debate: Savagery, Civilization, and Democracy*. Pennsylvania State UP, 2007.
- Taylor, Barbara. *Mary Wollstonecraft and the Feminist Imagination*. Cambridge UP, 2003.
- Todd, Janet. *Mary Wollstonecraft: A Revolutionary Life*. Weidenfeld & Nicolson, 2000.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Men*. 1790. *The Works of Mary Wollstonecraft*, edited by Janet Todd and Marilyn Butler, vol. 5, William Pickering, 1989. [ウルストンクラフト, メアリ『人間の権利の擁護』清水和子・後藤浩子・梅垣千尋訳, 京都大学学術出版会, 2020年]
- . *A Vindication of the Rights of Woman*. 1792. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 5.
- . *Original Stories from Real Life*. 1788. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 4.
- . *Thoughts on the Education of Daughters*. 1787. *The Works of Mary Wollstonecraft*, vol. 4. [ウルストンクラフト, メアリ『娘達の教育について』清水和子・後藤浩子・梅垣千尋訳, 京都大学学術出版会, 2020年]
- 梅垣千尋「『人間の権利の擁護』の研究史」ウルストンクラフト『人間の権利の擁護』, 234-61頁。
- 後藤浩子・清水和子「訳者解説」ウルストンクラフト『人間の権利の擁護』, 209-33頁。
- 清水和子・後藤浩子・梅垣千尋「訳者からのメッセージ」ウルストンクラフト『人間の権利の擁護』, iii-v頁。

半澤孝磨「解説」バーク『フランス革命の省察』, 391-417 頁。

平倉菜摘子「『人間の権利の擁護』—ウルストンクラフトの新たな言語」『桐朋学園大学研究紀要』第 39 号,
2013 年, 55-63 頁。